

(1) 正解①:fast・hard・early・late

[解説]fast・hard・early・late は、いずれも形容詞と副詞が同じ形になる語です。fast は a fast train「速い電車」／run fast「速く走る」、hard は a hard job「大変な仕事」／work hard「一生懸命働く」のように使われます。early・late も an early train / get up early、a late train / arrive late のように、形を変えずに形容詞・副詞の両方で使えます。②～④には friendly・careful・difficult・beautiful・sudden など、形容詞と副詞が同じ形にならない語が含まれるため、①が正解です。

(2) 正解①:自動詞は、動詞の後ろに目的語を必要としない動詞である

[解説]自動詞とは、動詞の後ろに目的語を必要とせず、それだけで文の述語になることができる動詞です。たとえば go・come・arrive などがあり、He went. のように目的語なしでも用いることができます。場所などの名詞を続ける場合は go to school、arrive at the station のように、一般に前置詞を用いてつながります。②は他動詞の説明であり、③のように必ず<to V>を置く決まりや、④のように後ろの名詞を修飾する働きもないため、①が正解です。

(3) 正解①:他動詞は、動詞の後ろに目的語を必要とし、「～を・～に」にあたる語を直接続けることができる動詞である

[解説]他動詞とは、動作・行為の対象となる目的語を、前置詞を介さずに直接後ろに続けることができる動詞です。たとえば I like music.「私は音楽が好きです」では、like が他動詞、music が目的語です。①が正しい説明です。②は目的語を必要としない「自動詞」の説明です。③のように他動詞と目的語の間に必ず前置詞を置くわけではなく、むしろ基本的には直接目的語を続けます。④のように、他動詞の後ろに必ず不定詞が続くわけでもありません。

(4) 正解①:be 動詞は、主語と後ろの語句を「＝(イコール)」の関係で結び、主語の状態・性質・正体などを説明する動詞である

[解説]be 動詞は、主語と補語を結び、<S=C>の関係を作るのが基本です。たとえば He is a doctor. では He=a doctor、She is kind. では She=kind という関係が成り立ちます。したがって①が正解です。②は目的語を取る他動詞の説明です。③のように具体的な動作そのものを表す動詞ではありません。また④のように、be 動詞の後ろに必ず前置詞を置くという決まりもありません。

(5) 正解②:自動詞でも目的語を前置詞なしで直接続けることができる

[解説]この問題は「間違っているもの」を選ぶので、②が正解です。自動詞は、その用法では目的語を直接取らない動詞です。たとえば go to school、arrive at the station のように、場所を表す名詞との間には前置詞を用います。した

がって「目的語を前置詞なしで直接続けることができる」とする②が誤りです。①は自動詞の基本的な説明、③は〈自動詞＋前置詞＋名詞〉の説明、④の go・come・arrive・happen も主に自動詞として使われるので正しい説明です。

- (6) 正解④: 他動詞の後ろに目的語を続ける場合には、原則として前置詞が必要である

[解説]この問題も「間違っているもの」を選ぶので、④が正解です。他動詞は基本的に、目的語を前置詞なしで直接続けます。たとえば have a car、like music、visit Kyoto、discuss the problem のようになります。したがって〈他動詞＋前置詞＋名詞〉が原則だとする④は誤りです。①は他動詞の基本的な説明、②も目的語を直接置くという正しい説明です。③の have・like・visit・discuss も、ここで示されている意味では他動詞として使われます。

- (7) 正解③: live は「～に住む」という意味の他動詞であり、I live Osaka. とできる

[解説]live「住む・暮らす」は、この意味では自動詞なので、③が誤りです。「大阪に住んでいる」は I live in Osaka. とし、× I live Osaka. とはしません。①の live in Osaka、②の live in a city / live near the station は正しい使い方です。また live は「生きる」の意味でも自動詞として使われるため、④の He lived for ninety years.「彼は90年間生きた」も正しい文です。

- (8) 正解③: run は「経営する」の意味でも自動詞なので、目的語の前に必ず前置詞を置く

[解説]run は意味によって自動詞にも他動詞にもなります。「走る」なら He runs every morning. のように自動詞として使えますが、「～を経営する・運営する」なら She runs a small restaurant. のように他動詞として使います。したがって③が誤りです。①・②はこの違いを正しく説明しています。また「公園で走った」は He ran in the park. のように場所を前置詞句で表せるため、④も正しい説明です。

- (9) 正解④: go と visit はどちらも自動詞なので、go to the museum / visit to the museum とする

[解説]go と visit は日本語ではどちらも場所への移動に関係しますが、後ろの名詞とのつながり方が異なります。go「行く」は主に自動詞なので go to Kyoto とします。一方、visit「～を訪れる」は他動詞なので visit Kyoto とし、基本的に to は置きません。したがって visit to the museum とする④が誤りです。①～③はいずれも、この自動詞・他動詞の違いを正しく説明しています。

- (10) 正解③: discuss と talk はどちらも自動詞なので、discuss about ～ / talk about ～ とする

[解説] discuss は他動詞、talk は主に自動詞です。したがって「その問題について話し合った」は We discussed the problem. とし、通常 × discussed about the problem とはしません。一方、talk は We talked about the problem. のように前置詞 about を用います。よって両方を自動詞とする③が誤りです。①・②・④はこの違いを正しく説明しています。

- (11) 正解①: look と see はどちらも他動詞なので、look the picture / see the picture とする

[解説]「見る」という意味でも、look は主に自動詞、see は他動詞として使われます。見る対象を表す場合、look は look at the picture と前置詞 at が必要ですが、see は see the picture と目的語を直接続けます。したがって look the picture とする①が誤りです。②～④はいずれも look と see の文型上の違いを正しく説明しています。

- (12) 正解②: listen と hear はどちらも他動詞なので、listen the music / hear the music とする

[解説]listen は主に自動詞、hear は他動詞として使われます。「音楽に耳を傾ける」は listen to the music とし、listen と music の間に to が必要です。一方、hear は hear the music「音楽が聞こえる」のように目的語を直接続けます。したがって listen the music とする②が誤りです。①・③・④はこの違いを正しく説明しています。

- (13) 正解③: get「～に到着する」も他動詞なので、I got the station. とできる

[解説]get は「～を手に入れる」なら get A の形で他動詞として使われます。I got a new computer. では a new computer が目的語です。一方、「～に到着する」では get to A とし、I got to the station. となります。この場合 station は前置詞 to の目的語です。したがって × I got the station. とする③が誤りです。①・②・④は正しい説明です。

- (14) 正解①: 完全文は必要な文の要素がそろい、不完全文は必要な要素が欠けている

[解説]完全文とは、その動詞が要求する主語・目的語・補語などの必要な要素がそろい、独立して文として成立するものです。たとえば I like music. は S+V+O がそろっています。不完全文は、その文を成立させるために必要な要素が欠けています。②は不完全文を「主語または動詞が欠けた文だけ」に限定している点が誤りです。③はすべての完全文に目的語が必要としている点、④は不完全文を「文法的には成立している文」としている点が誤りです。

- (15) 正解①: 主語は「誰が・何が」にあたる部分である

[解説]主語<S>は、文の中で「誰が・何が」にあたる部分で、動作・状態・性質など

の主体を表します。たとえば Tom plays tennis. では Tom が主語です。主語には名詞や代名詞などが用いられます。②の「誰を・何を」は目的語の説明です。③の「どのように・どの程度」は主に副詞の働き、④の「どのような」は主に修飾語の働きに関する説明なので誤りです。

(16) 正解①:目的語は動作・行為の対象となる語である

[解説]目的語<O>とは、動詞が表す動作・行為の対象となる語です。日本語では主に「～を」「～に」にあたり、I like music. の music、I met him. の him などが目的語です。目的語には名詞・代名詞などが用いられます。②の形容詞、③の副詞、④の前置詞そのものを目的語とする説明はいずれも誤りです。したがって①が正解です。

(17) 正解①:補語は主語や目的語と「＝」の関係になる

[解説]補語<C>は、主語や目的語の状態・性質・正体などを説明し、主語または目的語と「＝」の関係になる語です。He is a doctor. なら He=a doctor、She is kind. なら She=kind です。補語には名詞・形容詞などが用いられます。②は副詞・副詞句を補語としている点、③は補語を形容詞だけに限定している点、④は「＝の関係にはならない」としている点が誤りです。

(18)～(32) 不定詞の3用法・基本構文

(18) 正解①:主語・目的語・補語などになる用法

[解説]不定詞の名詞的用法は、<to + 動詞の原形>が名詞に相当する働きをし、文中で主語・目的語・補語などになる用法です。To study English is important. なら主語、I want to study English. なら目的語、My dream is to become a doctor. なら補語です。②は形容詞的用法、③は副詞的用法の説明です。④のように「話し手の判断だけを表す」用法ではありません。

(19) 正解②:名詞を修飾し、その名詞の内容などを説明する用法

[解説]不定詞の形容詞的用法は、名詞の後ろに置かれて、その名詞を修飾・説明する用法です。たとえば I have a lot of homework to do.「私にはするべき宿題がたくさんある」では、to do が名詞 homework を修飾しています。①は名詞的用法、③は副詞的用法です。④の「文全体の主語となる」という説明も形容詞的用法には当たりません。したがって②が正解です。

(20) 正解③:動詞・形容詞などを修飾し、目的・原因・結果などを表す用法

[解説]不定詞の副詞的用法は、動詞・形容詞などを修飾し、目的・原因・結果などを表す用法です。I went to the library to study. なら「勉強するために」

という目的、I was glad to see you. なら感情の原因を表します。①は名詞的用法、②は形容詞的用法です。④は不定詞が必ず目的語になるとしているため誤りです。

(21) 正解①:不定詞全体が動詞〈V〉の主語となるため名詞的用法

[解説]To study English is important. では、動詞 is の前にある **To study English 全体が主語〈S〉**です。「英語を勉強することは重要だ」という意味なので、不定詞は名詞的用法です。②のように目的語ではありません。また③のように is を修飾する副詞的用法でも、④のように動詞を修飾する形容詞的用法でもありません。したがって①が正解です。

(22) 正解②:不定詞全体が〈S+V〉を修飾するため副詞的用法

[解説]I went to the library to study English. の to study English は、「英語を勉強するために」という目的を表しています。つまり went to the library という動作に「何のために」という情報を加えているので、副詞的用法です。①・③のように不定詞が目的語や主語になっているわけではありません。また名詞を修飾していないため、④の形容詞的用法でもありません。したがって②が正解です。

(23) 正解①:不定詞全体が主語の内容を説明する補語となるため名詞的用法

[解説]My dream is to become a doctor. は「私の夢は医者になることです」という意味で、My dream=to become a doctor という関係が成り立ちます。したがって to become a doctor は**主語 My dream の内容を説明する補語〈C〉**であり、不定詞の名詞的用法です。be 動詞は目的語を取らないため②は誤りです。③の副詞的用法、④の形容詞的用法でもありません。

(24) 正解①:名詞を修飾すれば形容詞的用法、動詞・形容詞などを修飾すれば副詞的用法

[解説]不定詞の前までですでに完全文が成立している場合、不定詞が何を修飾しているかに注目します。たとえば I have a book to read. では to read が book を修飾するので形容詞的用法です。一方、I went there to see him. では「彼に会うために」と went を修飾するので副詞的用法です。②・③は名詞的用法との分類が逆で、④はすべて副詞的用法としているため誤りです。

(25) 正解①:不定詞全体が前の他動詞の目的語となるため名詞的用法

[解説]I want to study English. では、want は「～を望む」という他動詞であり、「何を望むのか」にあたる to study English が目的語です。つまり「英語を勉強することを望む」という関係なので、不定詞は名詞的用法です。②のように want の主語ではありません。また want を修飾して目的などを加える副詞的用法でも、名詞を修飾する形容詞的用法でもないため、③・④も誤りです。

- (26) 正解②:不定詞全体が前の自動詞の意味を詳しく説明するため副詞的用法

[解説]I went to the library to study English. では、went は自動詞 go の過去形であり、to study English は「何のために図書館へ行ったのか」という目的を説明しています。したがって不定詞は went の意味を詳しくする副詞的用法です。自動詞は目的語を直接取らないので①は誤りです。③の主語でもなく、④のように動詞を「名詞として修飾」するものでもありません。

- (27) 正解②:不定詞全体が前の形容詞の意味を詳しく説明するため副詞的用法

[解説]This book is easy to read. の to read は、形容詞 easy の内容を詳しく説明し、「読むのが簡単だ」という意味を作っています。このように形容詞の意味を補足・説明する不定詞は副詞的用法として扱います。①のように形容詞の目的語となる名詞的用法ではありません。また不定詞が文の主語でもないのです。③、形容詞を「名詞として修飾」するものでもないのです。④も誤りです。

- (28) 正解①:感情が生じた原因・理由を表す

[解説]I was surprised to hear the news. は「私はその知らせを聞いて驚いた」という意味です。to hear the news は、「なぜ驚いたのか」という感情が生じた原因・理由を表しています。このような「感情を表す形容詞＋to V」では「～して…だ」と訳するのが基本です。②の目的、③の結果、④の判断の根拠ではありません。したがって①が正解です。

- (29) 正解③:〈not to V〉

[解説]**不定詞を否定するときは、原則として不定詞の直前に not を置き、〈not to V〉**とします。たとえば I decided not to go there.「私はそこへ行かないことに決めた」となります。①の to not V ではなく、基本的な学習段階では not to V と覚えます。また否定には no ではなく not を用いるため、②・④も誤りです。したがって③が正解です。

- (30) 正解②:〈in order to V〉＝「～するために」

[解説]in order to V は「～するために」という目的を明確に表す表現です。たとえば I got up early in order to catch the first train.「始発電車に乗るために早起きした」となります。単純な to V より目的であることを明確に示せます。①の結果、③の名詞的用法、④の義務・必要を表す表現ではありません。したがって②が正解です。

- (31) 正解②:〈so as to V〉＝「～するために」

[解説]so as to V も「～するために」という目的を表す表現で、目的を明確に示すときに用います。たとえば He spoke slowly so as to be understood.「理解してもらえるように彼はゆっくり話した」となります。①の結果、③の程度、④の義務・必要を表す表現ではありません。したがって②が正解です。

(32) 正解③:〈too ~ to V〉=「V するには～すぎる」

[解説]**〈too+形容詞・副詞+to V〉は「V するには～すぎる」**という意味を表し、結果として「とても～なので V できない」という否定的な意味を含みます。たとえば This box is too heavy to carry. は「この箱は重すぎて運べない」という意味です。①の enough to V とは意味が異なります。②の目的、④の「程度が不足している」という説明も誤りです。

(33)～(47) 不定詞の重要構文・発展

(33) 正解④:〈too ~ for A to V〉

[解説]不定詞の動作を行う人が文の主語とは異なる場合、その人を不定詞の意味上の主語として〈for+A〉で表します。その位置は to V の直前なので、**〈too ~ for A to V〉**となります。たとえば This box is too heavy for me to carry.「この箱は私が運ぶには重すぎる」となります。①・②・③はいずれも for A の位置または形が誤っています。したがって④が正解です。

(34) 正解③:〈so ~ that S cannot V〉

[解説]〈too ~ to V〉は「とても～なので V できない」という意味を持つため、**〈so ~ that S cannot V〉**に書き換えることができます。たとえば This box is too heavy for me to carry. = This box is so heavy that I cannot carry it. となります。can V とする①では否定の意味が消えます。②の will not、④の must も too ~ to V の意味に対応しません。したがって③が正解です。

(35) 正解①:that 節は完全文にするため、read の目的語 it が必要

[解説]This book is too difficult for me to read. を so ~ that ... にすると、This book is so difficult that I cannot read it. となります。that 節では I cannot read it という完全文を作る必要があります。read は「～を読む」という他動詞なので、目的語 it が必要です。②の it は主語ではなく目的語です。③のように目的語を自由に省略することはできず、④の it も形式目的語ではありません。したがって①が正解です。

(36) 正解①:不定詞の中では read の目的語にあたる部分が欠けた形になる

[解説]This book is too difficult for me to read. では、主節の主語 This book が意味の上では read の目的語にあたります。つまり「私がこの本を読む」と考えれば I read this book という関係です。そのため、不定詞の中で this book をもう一度 it として置かず、to read で終わります。②のように不定詞では目的語を一切置けないわけではなく、③のように代名詞が使えない

わけでもありません。④も理由になりません。したがって①が正解です。

※問題文の This is book is too difficult ... は、This book is too difficult ... への修正が必要です。

(37) 正解①:live in the area の in が残る

[解説]live「住む」は自動詞なので、「その地域に住む」は live the area ではなく live in the area とします。The area is easy to live in. では the area が文頭の主語になっていますが、元の関係は live in the area なので、前置詞 in は残ります。②は live を他動詞としている点、③は easy+to V なら必ず前置詞が必要としている点、④は the area を不定詞の意味上の主語としている点が誤りです。

(38) 正解③:speak about the topic の about が必要

[解説]The topic is hard to speak about. では、the topic は speak about の前置詞 about の目的語にあたります。元の関係を考えると speak about the topic「その話題について話す」です。the topic が文の主語として前に出ても、前置詞 about は残す必要があります。①の the topic は不定詞の意味上の主語ではありません。②は前置詞を続けられないとしているため逆です。④のように前置詞まで省略すると、speak と the topic の関係が成立しなくなります。したがって③が正解です。

(39) 正解③:主語 This book が read の目的語にあたるため、目的語を重ねない

[解説]This book is easy to read. では、This book は文の主語ですが、意味の上では read の目的語にあたります。「この本を読む」と考えると read this book という関係です。そのため不定詞の中では目的語を省略し、to read で終わります。× to read it とすると、This book と it が同じものを重ねて表すことになります。①の不定詞は主語を単純に「修飾している」からではなく、この目的語関係が重要です。②のような自由な省略でもなく、④の「意味上の主語」という説明も誤りです。

(40) 正解④:〈enough+名詞〉／〈形容詞・副詞+enough〉

[解説]enough の位置は、何を修飾するかによって異なります。名詞を修飾するときは **enough time「十分な時間」**のように名詞の前に置きます。一方、形容詞・副詞を修飾するときは old enough「十分に年を取った」、**quickly enough「十分速く」**のように後ろに置きます。したがって④が正解です。①・②はすべて同じ位置としている点、③は正しい位置関係を逆にしている点が誤りです。

(41) 正解④:〈too ~ for A not to V〉

[解説]不定詞の意味上の主語は**〈for+A〉を to V の直前**に置き、不定詞を否定するときは not を to の直前に置きます。したがって両方を用いる場合は、基本的に **〈too ~ for A not to V〉**という語順になります。①・②のように意味上の主語を示せないわけではありません。また③のように通常 of A を用いるものでもありません。したがって④が正解です。

(42) 正解④:〈形容詞+enough for A not to V〉

[解説]〈形容詞+enough to V〉でも、不定詞の意味上の主語は**〈for+A〉を to V の直前に置きます。また不定詞を否定する not も to V の直前に置くため、〈形容詞+enough for A not to V〉**という語順になります。①・②のように意味上の主語を別に示せないわけではありません。③の of A もこの場合の基本形ではありません。したがって④が正解です。

(43) 正解①:〈It is〉の後ろには基本的に形容詞が置かれる

[解説]形式主語構文 **〈It is ~ to V〉**では、It を形式上の主語、後ろの to V を内容上の主語として扱います。たとえば It is important to study English every day. では important という形容詞が置かれています。It is a good idea to ~ のように名詞が置かれる場合もあります。②の動詞の原形、③の副詞、④の「基本的に名詞」という説明はいずれも基本形と異なります。したがって①が正解です。

(44) 正解①:形式主語

[解説]It is important to study English every day. の It は、文法上の主語の位置を埋めるために置かれた形式主語です。内容上の主語、つまり「何が重要なのか」を表しているのは後ろの to study English every day です。したがって It 自体が内容を持つ真主語ではなく②は誤りです。③の状況の it、④の特定のものを指す指示代名詞でもありません。したがって①が正解です。

(45) 正解①:〈for+人+to V〉

[解説]不定詞の動作を誰が行うのかを明示する場合、その人を不定詞の意味上の主語と呼びます。基本的には **〈for+人+to V〉**のように、不定詞の直前に置きます。たとえば It is important for you to study English. では you が study の意味上の主語です。②は位置が逆です。③のように必ず文全体の主語にする必要はなく、④のように不定詞から離して置くものでもありません。したがって①が正解です。

(46) 正解①:人の性質・性格なら of A、それ以外は原則 for A

[解説]〈It is ~ to V〉で意味上の主語を表す場合、通常は for A to V を用います。ただし、kind・careless・foolish・wise など、形容詞が A という人の

性質・性格を評価している場合は of A to V を用います。たとえば It was kind of you to help me. となります。②は for と of が逆です。③は肯定・否定で区別するものではなく、④も難易度・重要性という区別が逆になっています。したがって①が正解です。

(47) 正解④: kind・careless・foolish・wise

[解説]**kind「親切的な」、careless「不注意な」、foolish「愚かな」、wise「賢明な」**はいずれも、人の行為を通してその人の性質・性格を評価する形容詞です。そのため It is kind of you to ~ のように〈of A to V〉を用いることができます。①の natural・necessary・difficult、②の easy・possible・dangerous、③の necessary・hard・important などは、この意味での「人の性質・性格」を表す形容詞の組み合わせではありません。したがって④が正解です。

(48)～(58) 自動詞・他動詞と不定詞の発展

(48) 正解④: go・come・arrive・happen

[解説]**go「行く」・come「来る」・arrive「到着する」・happen「起こる」**は、ここで扱う基本的な意味では主に自動詞として用いられます。go to school、come to Japan、arrive at the station のように、場所を表す名詞との間に前置詞を用いることがあります。①には他動詞 have・visit、②には visit・discuss・meet、③には want・enter などが含まれているため、すべてが「主に自動詞」の組み合わせではありません。したがって④が正解です。

(49) 正解④: have・try・visit・discuss

[解説]have・try・visit・discuss は、ここで想定されている基本的な用法では目的語を直接取る他動詞として使われます。たとえば have a car、try a new method、visit Kyoto、discuss the problem のようになります。①の arrive・come・rise、②の go、③の remain・stay などは主に自動詞として使われるため不適切です。したがって④が最も適切な組み合わせです。

(50) 正解②: 〈something hot to drink〉

[解説]something・anything・nothing など -thing で終わる不定代名詞を形容詞が修飾する場合、形容詞はその後ろに置きます。したがって「何か暖かいもの」は something hot となります。さらに「飲むための」という不定詞 to drink も後ろから修飾するため、**something hot to drink「何か暖かい飲み物」**となります。①は hot の位置、③・④は不定詞の位置が誤っています。したがって②が正解です。

(51) 正解②:〈something cold to eat〉

[解説] something を形容詞 cold が修飾するときは、通常の〈形容詞＋名詞〉とは異なり、something＋形容詞の語順になります。さらに「食べるための」という to eat を後ろに続けて、**something cold to eat「何か冷たい食べ物」**となります。①の cold something は語順が誤りです。また③・④のように to eat を something の前に置くこともできません。したがって②が正解です。

(52) 正解②:〈something interesting to read〉

[解説] something を interesting が修飾する場合、形容詞は something の後ろに置いて something interesting とします。さらに「読むための・読むべき」という形容詞的用法の不定詞 to read を続け、**something interesting to read「何か面白い読み物」**となります。①は interesting の位置、③・④は不定詞の位置が誤っています。したがって②が正解です。

(53) 正解②:sit on a chair の on が必要

[解説] sit「座る」は自動詞なので、「いすに座る」は sit a chair ではなく sit on a chair とします。Jane needs a chair to sit on. では、a chair は意味の上で前置詞 on の目的語です。a chair が不定詞の前に出ても、前置詞 on は残るため、× a chair to sit ではなく a chair to sit on となります。①は sit を他動詞としている点、③は a chair をもう一度置くとしている点、④は不定詞の動詞を自動詞だけに限定している点が誤りです。

(54) 正解③:〈write with ～〉の with の目的語が前に出ている

[解説] I need some sheets of paper to write with. は「書くのに使う紙が何枚か必要だ」という意味です。元の関係を考えて **write with the paper「その紙を使って書く」**であり、some sheets of paper は前置詞 with の目的語にあたります。その名詞が不定詞の前に出ても with は残るため、to write with となります。①のように write の後ろに常に with が必要なのではありません。②・④も paper を write の直接目的語としているため、この文の関係を正しく説明していません。したがって③が正解です。

(55) 正解③:〈something＋形容詞＋to V〉

[解説] something を形容詞と不定詞の両方で修飾する場合は、**〈something＋形容詞＋to V〉**の語順にします。したがって「何か着るのによいもの」なら something nice to wear となります。問題文の × something wear to nice は、nice と to wear の語順が崩れています。①の〈形容詞＋something〉、②の〈something＋to V＋形容詞〉、④の〈to V

+ 形容詞 + something〉はいずれも誤りです。したがって③が正解です。

- (56) 正解③: that 節を完全文にし、for A を主格の主語に変え、時制にも注意する

[解説]〈～ enough to V〉を〈so ~ that ...〉に書き換える場合、that の後ろには〈S+V〉を備えた完全文を作ります。また不定詞に意味上の主語〈for A〉がある場合、A を that 節の主語にします。たとえば He was old enough for him to understand it という関係なら、that 節では that he could understand it のようにします。また主節が過去なら can → could など、時制にも注意が必要です。①は for A をそのまま残す点、②は that 節を完全文にしなくてもよいとする点、④は必ず can としている点が誤りです。したがって③が正解です。

- (57) 正解①: モノを主語にすると、不定詞内ではそのモノにあたる目的語などが欠けた形になる

[解説] The problem is easy for him to solve. では、The problem は文全体の主語ですが、意味の上では solve の目的語です。元の関係は He solves the problem. です。そのため the problem を文頭の主語にした後、不定詞の中では目的語をもう一度置かず for him to solve とします。× He is easy to solve the problem. では、主語 He が「解くのが簡単な対象」であるかのような構造になってしまいます。②のように不定詞を使えないわけではなく、③のように意味上の主語が常に必要なわけでもありません。また④では文の主語と不定詞の意味上の主語を混同しています。したがって①が正解です。

- (58) 正解①: 「新しい仕事を得るために」という目的を表すため〈to get〉を用いる

[解説] My sister went back to university again to get a new job. の to get a new job は、「何のために大学へ戻ったのか」を説明する目的を表す副詞的用法の不定詞です。したがって「新しい仕事を得るために」という意味を明確に表す to get が適切です。②の getting が went back の目的語になるという説明は誤りです。③では「同時進行」としながら「目的を表す」としており不適切です。また④のように「仕事を得た結果、大学へ戻った」という結果関係を表しているわけでもありません。したがって①が正解です。